

東京陵水

賀正
平成22年元旦
陵水会東京支部役員一同

年次総会を成功させ、 東京陵水発展の基盤固めとしよう

陵水会東京支部長 西坂 徹 雄

新年明けましておめでとうございませう。

昨年は、世界同時不況や新型インフルエンザなど何かと暗い話題の多い年でしたが、新年は経済面での厳しさは続くとしても、少しでも穏やかな年であって欲しいものです。

皆様には、平素より陵水会東京支部の活動につきご理解とご支援を賜り厚くお礼を申し上げます。

新年度の東京陵水の年次総会は、七月三日(土)の午後四時より上野精養軒で開催します。

年次総会と懇親会は陵水会活動の原点であり最大のイベントですので、是非多数の会員の方々にご参加頂くようお願い申し上げます。

なお、ウイークデイが多忙な会員の方々にもご参加頂けるよう、初めての試みとして、週末土曜日の午後の開催と致しました。

昨年の年次総会は大学二十一回卒業生諸氏の組織力のお蔭で「総会のテーブルで楽しい同期会」を合言葉に、合計二百四十四名が参加され盛大な総会を開催出来ました。

本年度の総会は当番幹事を大学二十二回卒業生(昭和四十九年三月卒)の方々にお願いし、二百五十名の参加を目標に準備を始めてもらっております。

年次総会の為の当番幹事制は、先輩諸氏の発案で七年前に大学十四回卒業生を初回としてスタートしました。五十七歳から五十

二頁二段へ続く

目次

- 1面 支部長年頭所感・22年度年次総会
- 2面 新学長に佐和隆光氏
- 3面 21年度支部総会
- 4面 22年度総会講演要旨
- 9面 「こんにちは」
- 11面 滋賀大学経済学部への思い

- 13面 文芸
- 14面 ゴルフ談話
- 16面 クラブ同窓会
- 17面 同期会報告
- 18面 彦根コンフィデンス
- 19面 年会費納入者



上野精養軒本館

平成二十二年度総会の概要

年度幹事代表 長井 和男

開催日・七月三日(土)

午後四時～午後七時三十分

開催場所・上野精養軒

本年の陵水会東京支部の総会の幹事役を仰せつかった我々昭和四十九年卒(第二十二回)は、支部幹部の皆様のご指導とアドバイス頂きながら打合せを行っております。

○幹事メンバー

長井和男(経営再建コンサルタント)

多くの方に出席していただく様、従来とは異なり土曜日開催となります。

テーブルを囲んで、料理を楽しみながら歓談していただく事とし、テーマは「上野精養軒のグルメ料理を囲んで同窓会を」です。(去る十一月二十八日役員・幹事による試食会を実施し、料理のおいしさは確認しております。)

「講演」は今回無しとし、代わりにゲーム等で楽しんでいただく時間を検討しております。

尚、来賓として滋賀大学学長、陵水会理事長のご参加を予定しています。

○会費・七〇〇円
○出席人数目標

より多くの方に出席して頂けるよう土曜日開催としましたので、前回を上回る、二百五十名を目標としております。

詳細の詰めに同期幹事は鋭意準備中ですが、会員皆様からのご協力をお願いすると共に、多くの皆様のご参加をお願いします。

尚、総会出欠のご案内のがきが本紙に同封されておりますので、来る三月十五日までにご返送ください。「出席」でのご返事は是非お待ちしております。

精養軒のご案内

〒一〇一八七二五

住所台東区上野公園四番五八号

電話〇三―三八二―二一八一

行き方

- ① JR上野駅公園口から徒歩五分
- ② 京成上野駅から徒歩五分
- ③ 地下鉄上野駅から徒歩八分
- ④ JR御徒町駅・地下鉄上野御徒町駅から徒歩十二分

滋賀大学学長に佐和隆光氏



年の経済学研究の業績を評価され紫綬褒章を受章している。専攻は計量経済学、エネルギー・環境経済学。

著作では「計量経済学の基礎」で一九七〇年に日経・経済図書文化賞を受けているほか、「経済学とは何だろうか」「これからの経済学」「日本の構造改革」「市場主義の終焉」(以上岩波新書)などが一般に知られている。

※一頁二段から続く

十九歳の方々に毎年当番幹事をお願いすることになります。

ここ数年は、当番幹事年度の卒業生の内、半分から七割に当たる二十名内外の方々に総会の準備に携わって頂き、その後も常時東京陵水の各種の活動に協力と支援を頂けると言う良い循環になって来ております。言わば総会参加を契機に実質的な陵水会員に昇格して頂くと言う構図が出来つつあります。今後はこの世代が東京陵水の最大勢力になるかと思っております。

来年度の当番幹事をお願いする二十三回卒業生(昭和五十年三月卒)も東京地区在住者が四十名を超えておりまして、盛大な総会が期待出来ます。

更に、陵水会名簿により

と、その後の約十年間の卒業生についても、東京地区在住者は平均で三十名を超えており、四十名を超える年度もいくつかある程です。文字通り、滋賀大学経済学部卒業生の黄金時代であったと言えます(昨今の新卒業生の東京地区就職は二十名を超えることはありません)。

一方、過去十数年間東京陵水会の発展を支えて頂いております本科一回から二十四回卒と別科/工専卒の百五十人強に及ぶ大先輩の方々と、短大卒を含め大学一回から十三回卒の約二百五十人の先輩の皆様には心から感謝すると共に、今後も変わらぬご支援をお願いする次第です。

大変有り難い事に、東京陵水のシニアの先輩諸氏はお元氣な方々が多く、ここ数年の退会者は非常に少なく、数える程です。かかる状況下、本年七月の土曜日総会が成功し、当番幹事制による拡大路線が定着すれば、今後の東京陵水の更なる発展は間違いなしと言っても過言ではありません。

勿論総会に出席頂く皆様には十分満足して帰って頂き、来年も又参加するぞと思ってもらえる総会・懇親会にする事が重要と考えております。更に東京陵

水会の活動そのものが会員諸氏にとりまして、単なる仲良し会を超えた魅力と活力に富むものにする事も必要です。

新年度の課題としては、母校への貢献として、東京陵水の皆様の中から我こそはと言う方にご協力願ひ、卒業生として、また経済人としての経験を基に、現役学生との接触を通じて、彼らの学力と人間力の向上に役立つ何かが出来ればと考えております。滋賀大学もこの四月には新学長が就任され、一層の大学改革と学生の学力向上に取り組まれると期待されておりますので、陵水会としての具体策を提案出来ればと願っております。

新年度を迎え、役員一同は東京陵水会が総会参加者二百五十名、会費納入者五百名の時代に入りつつある事を認識し、東京陵水の発展の為に一層努力する所存ですので、会員の皆様の暖かいご支援を心からお願ひ申し上げます。

支部役員会開催さる

平成二十一年度陵水会東京支部役員会が、旧年十一月七日(土)午後四時から上野精養軒で開催された。今回は来る七月三日(土)開催される支部総会

高木 税務 会計 事務所

高木 早苗 (経専第24回卒業)

〒177-0041 東京都練馬区石神井町 7-18-10

TEL 03 - 5393 - 3986

の会場下見を兼ねていることから、開始時刻、懇親会の料理も当日に合わせたものとなった。支部長挨拶のあと、加藤幹事長から、昨年八月実施の「構造改革アンケート」(三年間音信不通者、年会費未納者対象)結果が報告されたが、回答率の予想外の低さ(十二%)が話題となり、当該対象者への今後の会報(「東京陵水」)送付の是非や、会費納入率アップ対策等につき討議がなされ、執行部で検討することとした。

平成二十一年度東京支部総会 同期会、クラブ、ゼミの同窓会の協力を基軸に二百余名

平成二十一年五月十九日(火)午後六時から、港区元赤坂二丁目二十三、明治記念館「富士の間」において、会員二百十一名と昨年の百五十名を大きく上回る出席者を迎えて賑やかに開会された。今回の開催、運営には大学二十一回生が当番幹事として当たり、在京同期会、クラブ、ゼミの同窓会がそれに協力と支援をした。

司会を加藤博善幹事長(大14)が担当。守谷貞夫副支部長(大12)の開会の宣言、西坂徹雄支部長(大9)の挨拶の後、総会に入る。議長に箸方海三氏(大4)を選び議事に進んだ。



会場一杯の出席者



テーブルごとの同期会

推進。会報「東京陵水」を年二回発行から一回発行とし、同紙掲載広告の拡充。総会、役員会の定例会合及び、ホームページ運営委員会などの開催。総会参加促進と年会費納入の促進。及び収支予算計画、支部役員留任、本部評議員の留任等、について山本副幹事長から提案、承認された。

講演会は十八時三十分から、加藤幹事長の講師紹介の後、直ちに母校阿部安成教授の講演「銅像となったナオスケ……難産と受難」が写真資料の掲載されたレジメに従って進行した。午後七時過ぎから懇親会は、「総会で同期会」のコンセプトによりテーブルにそれぞれの年次同期生がまわって座に就いて開会。テーブルの様子では六

回生十人の参加をはじめとして、各回毎にまわった人数の参加が目立ち、始まる前から同期会の雰囲気は横溢している。「同じテーブルで同期会を」のPRが効を奏したのだろう。過去に出席を見なかつた大学年次も、互いに同期を誘って出席している姿があった。

乾杯の発声を、陵水会理事長大森修太郎氏にお願いした。暫く懇談の賑わいが続いたあと、「シャンソンの夕べ」が開かれた。シャンソン歌手車戸兵磨氏(田中和夫氏 大18)の美声で馴染みのシャンソンが田中啓子氏のピアノの伴奏にのせて流れた。本会年次幹事の二十一回生を代表して、射場茂喜氏が挨拶。全出席者から労いの大きな拍手を浴びた。



22年度幹事挨拶

来年度年次幹事二十二回生が段に上った。代表して長井和男氏が挨拶、決意と協力の要請を込めた挨拶があった。終宴の前に三井照次氏(大10)指揮による彦根高商校歌、滋賀大学学歌の大合唱が起こった。最後に中辻喜蔵氏(本21)が三本締めを元氣よく、拍手が一致したところで午後九時盛會裡に二十一年度総会は終了した。

総会に出席した思いを

○支部総会に二年続けて参加いたしました。私事ながら昨年は陵水会支部総会の後というわけか同窓会続きの一年となりました。京都で中学、高校の同窓会も参加し、そこで幼稚園よりも以前の幼なじみとも数年ぶりに再会できました。この歳になると全然変わってないねと言われるのが何よりの褒め言葉、たとえお世辞であってもうれいものです。何十年も連絡を取っていない人に再会するのはもうひとつ気乗りしない、学生時代も良い思い出ばかりとは限らず人と会うのに躊躇することもあると思います。今の生活や仕事に追われそれどころではない、多忙な毎日を送っておられる方が多いというのが現実で

す。ただ、私は昔の友人と会えておられます。

上田(大西)信子(大29)

てただ懐かしいだけではなく得ることも多かったです。大学生の息子にも同窓会の案内が来たら、行ってくればと勧めています。彦根もずいぶん観光客の多い街となりましたが、変わってない場所も多く残っているのですね。帰省のときに彦根に立ち寄りました。滋賀大学にも昔の雰囲気が残っていました。今回の多くの卒業生に陵水会支部総会への出席を呼びかけ、企画・準備してくださった皆様本当にありがとうございます。感謝し

記念講演要旨

「銅像となったナオスケ…難産と受難…」

講師 滋賀大学経済学部 阿部 安成 教授

(はじめに阿部教授の自己紹介(はじめに本学へ着任して着手した研究課題の説明、挨拶があった。)) 彦根に来たにもかかわらず、その研究というのがちょっと中断した研究というのがちよつと中断した研究というのが、一昨年彦根では、彦根城築城四〇〇年祭が行われました。また去年から二年に亘って、「井伊直弼

れている方々や引退された方、職種や業界も様々ですが、とても和氣藹々とされていて、改めて滋賀大学の先輩、OB、OGの活力を感じたことです。

社外で様々な年代の方と大学時代や社会生活のお話ができるのは、減多にない機会なので是非また来年参加させていただきたいです。

また女性の参加がまだまだ少ないので、女性の参加が増えるよう呼びかけていければと思います。

松江千尋(大53)

えているオリジナル性のある研究として直弼の研究を改めて今行っているのです。今日はその直弼の研究を、「井伊直弼と開国」というタイトルでその一端



を披露させていただきます。

さて、私の直弼研究のオリジナルティーはどこにあるのかについて述べますと、直弼の銅像を研究の対象にしているという

所にあります。今日の講演では、この直弼の銅像についてそして直弼の銅像が出来るに当たっては非常に難産だったということ、そして、建ってからこの直弼の銅像は幾つかの受難に会った、この二つに絞って、お話を進めていきます。私が子供の頃、必ず読まれた本のシリーズとして偉人伝あるいは伝記の類があります。そうした本の書き方には一つの決まった型というものがあります。偉人伝の対象となる人物の生誕から死没までを描くという、これはどの偉人伝、伝記にも共通した決まり切った型があります。私の研究というのはそうではなくて直弼が亡くなったその後を対象とします。別に言うとならぬ、その人がどのような人物であったのか、ということにあまり私は関心はなくて直弼が亡くなった後、彼はどのように見られたのか、あるいは起されたのか、あるいは直弼はどのように顕彰されたり否定されたりしたのか、そういった、その後という所に関心を向けているという所が私の研究の一番大きなポイントになっています。

ではこの直弼という人物、一般にどのように考えられているのでしょうか。例えば高校の日本

株式会社トッパンNEC サーキットソリューションズ

取締役会長 田川 行雄 (大9回卒)

〒108-8536 東京都港区芝浦3-19-26 トッパン芝浦ビル ☎03-5419-9700



近代化の端緒を開く

この時、先ほど言いましたように銅像除幕式が延期される、させられるという出来事がありましたが、当時の世の中の論調というのを見ると、まるで生きている直弼に勲章を授けることが正しいのかどうか、そんな勢いで直弼の銅像をめぐる議論が行われていった。このことは当時の人々にとってみれば五十年前という昔が決して遠い過去のことではなくて、生き生きと感ぜられる時間なんだ、そんなことを表しているように思えます。

横浜に建った直弼の銅像は建立からしばらくしたところで銅像自体とその周辺の公園がセツトになって大正の終りに横浜市に寄付されます。今では掃部山公園と呼ばれているこの掃部山

この時、先ほど言いましたように直弼の官職に由来している所にあります。この時に銅像建立者たちは幾つかの条件を付けます。一つは直弼の銅像を決して動かさないこと、そしてもう一つは其の公園には直弼にゆかりのあるもの以外は建ててはいけないという事だったわけです。寄贈者たちはその銅像が建っている公園を、より一般に開放することでその公共性を高めたんだという風に言えますが、その上で尚その公園というのは直弼を考える場所以外に使ってはならない、なにより直弼を想起する思い起こす場所なんだという風に示したという風にいえると思います。

現在でいえば県立の図書館がありますその裏手になります。直弼の銅像は、当時横浜に建つ唯一の銅像となりました。その一方で直弼を暗殺したものは、明治の初年から絵草子と呼ばれる絵と文章がセツトになった読み物に盛んに取り上げられていくようになります。そうした中で直弼の暗殺者たちは桜田義士、義に殉じて行動を起こした者たちという風に称えられていきます。こんな風に明治の初年から直弼が主役ではなくて直弼を暗殺したものが主役

直弼の銅像は、当時横浜に建つ唯一の銅像となりました。その一方で直弼を暗殺したものは、明治の初年から絵草子と呼ばれる絵と文章がセツトになった読み物に盛んに取り上げられていくようになります。そうした中で直弼の暗殺者たちは桜田義士、義に殉じて行動を起こした者たちという風に称えられていきます。こんな風に明治の初年から直弼が主役ではなくて直弼を暗殺したものが主役

直弼の銅像は、当時横浜に建つ唯一の銅像となりました。その一方で直弼を暗殺したものは、明治の初年から絵草子と呼ばれる絵と文章がセツトになった読み物に盛んに取り上げられていくようになります。そうした中で直弼の暗殺者たちは桜田義士、義に殉じて行動を起こした者たちという風に称えられていきます。こんな風に明治の初年から直弼が主役ではなくて直弼を暗殺したものが主役

直弼の銅像は、当時横浜に建つ唯一の銅像となりました。その一方で直弼を暗殺したものは、明治の初年から絵草子と呼ばれる絵と文章がセツトになった読み物に盛んに取り上げられていくようになります。そうした中で直弼の暗殺者たちは桜田義士、義に殉じて行動を起こした者たちという風に称えられていきます。こんな風に明治の初年から直弼が主役ではなくて直弼を暗殺したものが主役



直弼銅像 (2)

星出公認会計士事務所

所長 星出 潔 (大13回)

〒112-0002 東京都文京区小石川2丁目3番28-805号

TEL 03-3815-3451 (代表) FAX 03-3815-3637

E-mail : khoside@cameo.plala.or.jp

戦後日本とアメリカは占領という関係ではあれ、兎も角両者の友好というものが作りだされて行くようになります。そうした時代には、直弼は日米外交の始まりを作った人物として高く評価されるようになります。時代の様子がある人物の評価を左右するという顕著な例になります。

一方でこの対極にあるのが、

一九三〇年代の様子になります。

一九三〇年代、日本が世界の中で孤立を深め、さらに国内ではテロが横行する時代の中では、なんと直弼の銅像それ自体が攻撃の対象に会うという出来事があります。これは横浜に建っている銅像を、国粋を掲げた天照議団と名乗る集団が襲撃しようとした出来事です。天照議団は天照の義に殉じるといふような綱領を掲げた集団です。ただし、この襲撃は未遂に終わる訳ですが、銅像襲撃しようとしたものは懐に斬奸状を擁したうえで直弼の銅像の首を取ろうとして狙う、そうした出来事が起こりました。しかも、この日付が三月の三日という風に報道されています。天照議団のメンバーたちは桜田門外の変を、直弼その人ではなく銅像を相手にして再

現しようとしたという風に言え

ます。そしてこの事件は未遂に終わったものの、直弼はその銅像であってもこの世に存在することを決して許さないという風に考える強烈な意志が世の中にあったという事を示しています。そしてさらにこの出来事は失敗に終わったとはいえず、その後直弼の銅像にまつわる伝説とい

べきものを生み出しました。これは若いころの吉川英治が



掃部山公園

ている。そんなようなその後を生み出しています。唯この一九三〇年代直弼の銅像さえ狙われたということなんですが、しかしこのことは社会の中では広く登用された認知された出来事とは言えないだろうと思います。というのは三月三日という特定の日に狙ってその決起を行わなくてはいかなかった、そんな風に強烈に出来ごとの記念日というものを活用しなければ直弼が思い起こされない、一九〇九年の二十世紀の初頭の直弼の扱われ方とは世の中の様子がだいぶ変わったということを表しているだろうと思います。

そして、今、開国一五〇年祭ということで彦根でも横浜でもイベントが行われている訳なんです。彦根で直弼の扱い方はどうか、確かにタイトルでは「井伊直弼と開国一五〇年祭」と銘打たれている訳なんです。残念ながらそこでは十分に直弼の検証が行われているとは言えないように思っています。それ

というのも彦根で一番人気があるのはひこにゃん、直弼ではないですね。私はもしかすると、数年後には直弼何年祭なんていうことではなくてひこにゃん生誕十年祭なんていうのが行われ

るんじゃないかという風にも思っているところなんです。本来はもっと直弼が主役であった筈なのでその直弼がどういう人物だったのか、或いはそれがその後どのように考えられたのかということももっと議論されてもよいように思います。

ここで纏めとして、最後に二

つのことを述べようと思います。

どちらも歴史の見方にかかわることです。一つはナショナルな



公園内標識

ものとローカルなものという組み合わせ、どこの土地にもその土地の郷土の英雄というのがあるでしょうけれども、その郷土の英雄というのが国の規模でもナショナルな規模でも偉人として讃えられる、これが歴史を検証する一番の価値なのではないか、直弼の銅像をめぐる事態と

いうのはこうした歴史の見方を表しているように思います。色

んな所に英雄はいるでしょうけれども、その偉人や英雄が郷土の中で誇られているだけでなかなかそれを日本全国に向けて発信することはできない。直弼の場合は、そうではなくて地元の殿様である、と同時に江戸幕府の大老でもあった、さらに直弼は日本の歴史の喚起になる条約締結という偉大な事業を成し遂げた人物、だからこそ、直弼は単に彦根の英雄にとどまるだけではなくて、日本の偉人として称えられている面があります。

しかし一方でいえば、直弼はそうした偉業を成し遂げたにもかかわらず、安政の大獄というものを引き起こしてしまったがために其の評価が分かれるところになってしまっている。そんな風になります。そしてこの直弼の見方というのは彦根だけに留まらず、横浜でも通用する見方になっていきます。先程もい

ましたように横浜では横浜の開港五〇年を記念する一九〇九年に横浜で唯一の銅像として直弼の銅像が建ったわけです、直弼は一回だけ横浜に行ったことがありますが、その一回だけ確認しているのはその一回だけなんです、その意味でいえば横浜と直弼のゆかりというのは

楠田 昭和四十年代、鉄鋼業は

国策に添い発展し、当社も呉に高炉二基を建設して、念願の高炉メーカーの仲間入りを果しました。

高炉関連の建設には莫大な資金を要し、神戸製鋼堺工場の買収と以前より進めて来たステンレス鋼増強の投資も加わり、設備投資が集中した資金難の時期に、資金業務に専念することになり「資金のプロ」として、二十年近く内外の金融機関より低利安定資金調達のため、活動を続けて来ました。

その間、国内では景気過熱防止のため、再三、日本銀行による金融引締めが行なわれ、企業の黒字倒産が多発し、当社も関係先が倒産して、大口不良債権が発生した厳しい時期もありましたが、主力銀行の協力を得て何とか克服して来ました。

昭和五十年代、金融が自由化、国際化して資金調達が多様化しました。

当社も、国内では転換社債、海外では欧州で外債を発行し、財務内容を改善しました。特筆すべきことは、当社が日本最初のスイスフラン建変動利付債を発行し、大きな金利節減の成果をあげたことであります。

当時、市場ではスイスフランの金利は近々、大幅に下落すると予想されていました。

しかし、当社には、資金繰りに余裕がなく、起債を延期して金利の低下を待つことは不可能でした。今、起債すれば、期限までみすみす高金利を負担せねばならず、それには耐えられないので、思い切って起債主幹事のシチイバンク、スイツランド社の幹部に直接相談したところ、社債の格は少々落ちるけれども、ユーロ・スイスフラン六カ月ものの金利に口銭（スプレッド）を乗せた変動利付債の発行が可能であることが判明しました。

検討の結果、実をとり、一億スイスフラン建（邦貨約百億円）変動利付債の発行を決めました。その後、スイスフランの金利は予想通り大きく下落し、その上、予期せぬ大幅な円高による大量の為替益が発生し、約二十億円の巨額な利益を獲得しました。

我々は外国為替相場変動の恐ろしさを体験し、「窮すれば、通ずる」プロとしての決断を誇りに思っております。

このような業務実績が評価され、昭和五十八年、役員に昇進

しました。

その後、会社の発展は

楠田 会社はその後、高度成長の波にのり、高炉メーカーとして発展し、企業規模も拡大しました。依然、大手高炉との企業格差は大きく、その是正のため、あらゆる面で厳しい合理化努力をして来ました。従業員にも格差是正の意思が伝わり、各分野での業務改善努力となつて、企業活動は一層活性化しました。そして、大手高炉とはひと味違った独自のたくましい企業文化が出来上がり、その活力が会社発展の大きな原動力になりました。

販売戦略を指揮

楠田 昭和六十年、常務取締役となり、販売を担当することに昇格して、販売を担うことになりました。会社は未経験の自分を販売業務の責任者に任命したのは、大きな変革を期待していることと思ひ、自分流のやり方で思い切って指揮する決意をしました。

販売戦略として、当社独自の高付加価値製品であるステンレスと特殊鋼鋼板、ペントタイト、アルスター等表面処理鋼板に重点をおき、高成長の自動車と建

材関連の分野に拡販する方針を示し、努力して来ました。販売時代の八年間は、販売戦略の指揮と全国の需要家訪問に明け暮れ、一瞬のうちに過ぎ去ってしまったように感じます。

しかし、自分の努力が当社独自の販売力強化に多少でも貢献したものと確信しております。

その後、平成五年、副社長を最後に退任し、関係会社新和企業（株）の社長として業績の向上にも寄与して、平成十三年、七十年の勤続でした。

波乱万丈の人生でしたな

楠田 実に五十年間、多くの人々に支えられ元気で精一杯働くことが出来ました。仕事に鍛えられた幸運な人生であったと思ひます。

かえりみれば、自分の進路が大きな時代変化の荒波を受けて、悪戦苦闘を繰り返して来ましたが、鉄鋼業の成長期に会社重視の資金と販売の業務に専念し、会社の業績向上にも貢献できたものと自負しています。

そして、関係会社の社長として企業経営を体験し、「経営は経営管理であり、人間管理につきる」ことを実感しました。常に実力以上のものに挑戦し

藤本幸延 (大15回)

富士貿易

〒658-0063 神戸市東灘区住吉山手9-7-8

TEL 078-822-0815

て来ましたので、仕事に対する姿勢は厳しかったと思いますが、その人間力、仕事力が部下をアピールして、協力が得られたものと確信しています。

いずれにしても、自分の進路がたまたま日本経済の高度成長期に当り、鉄鋼業と会社の最盛期に合致した幸運に感謝せねばと思います。

——後輩に望むことは

楠田 自分の生き様を披瀝することにより、後輩の諸君に私のような「並み」の凡人でも、努力すればこれ位のが出来た事実を伝え、今後、何等かの参考にしてもらい、勇気付けが出来ればと願っております。

人間には誰でも必ず試練期がありますので、厳しくつらい時、人間は鍛えられ成長するものと思ひ、勇気を出して挑戦し、「あせらず」、「くさらず」、「あきらめず」ねばり強く、努力してもらいたいと思います。

どんな時代でも、真面目に努力すれば、必ず「チャンス」が到来するものと信じ頑張つて下さい。ご健闘を祈っております。

名画の観賞

——趣味について

楠田 私はビジネスマンとして、多忙な日々を送って来まし

たが、それでも「忙中、閑あり」

で自分のささやかな趣味である名画の観賞と海外旅行、ゴルフ等を楽しむことが出来ました。米国出張の際には、仕事の合

い間をみて、ニューヨークのメトロポリタンや、ボストン、シカゴの三大美術館を訪れ、多くの名画を観賞しました。

欧州では、自分の好きなモネ、セザンヌ、ゴッホ等近代印象派

の作品を中心に、パリのルーヴルの有名美術館を歴訪し、感銘が深く、何度も立ち去りがたい心境になりましたが、多数の名画に接することが出来ました。

海外旅行では会社の出張や余暇を利用して、欧米とアジアの諸国を何度も訪れ、各地固有の歴史や文化に直接ふれ、視野を広めることが出来ました。

欧州では地中海沿岸のイタリヤとスペインに興味をもち、再々訪れました。

起債のためよく訪れたスイスは、アルプスの山々と多くの湖沼は風光明媚で、レマン湖周辺のジュネーブ、ローザンヌ、エビアン（仏領）、シヨン城とウイリアム・テルの故郷ルツェルン、名峰山麓の町インターラーケンやチエルクマットには何度

も足を運びました。

その都度、写真をとり持ち帰りましたので、いつの間にか数冊の写真集が出来上がり、楽しい思い出がぎっしりとつまっています。

また、ゴルフ発祥の地で有名

滋賀大学経済学部の思い出と彦根の経済学部にかける思い

元滋賀大学経済学部教授

（経営学）加藤 勝康

以前『彦根論叢』第三〇一号（一九九六年五月）に「思い出すまに」という一文を寄稿させていただきました。あれから早くも十三年の歳月が流れました。再び「彦根の思い出」を語る機会が与えられましたことは誠にありがたい機縁であります。前回は、当時の経済学部事務長、「六さん」の愛称で親しまれていた長谷川六二郎さんの

芹川の持家での苦労話などを交えて、思い出を語りました。今回は滋賀大学経済学部での教師生活の思い出と今日の高等教育の激動時代における経済学部にかける思いをめぐって、述べさせていただきます。

なスコットランドのセントアンドリュース・オールドコースでプレーしたことや、音速より速いコンコルド機でロンドン、ニューヨーク間を飛行したこと

等、楽しい思い出が多く残っています。

一 神奈川大学法経学部から滋賀大学経済学部へ

一九六〇年に、当時、河野豊弘先生が担当されていた経営学総論を共に担当する専任講師として神奈川大学法経学部へ赴任したのが私の大学教師としての出発点でした。東京商科大学における私の勉強は、恩師杉本栄



一先生の下でマーシャル・ケインズ・マルクスなど、専ら経済学を学んでおりましたので、経営学の勉強とは無縁でありました。たまたま健康上の理由もあり、卒業後十年ほど家業に携わり、身をもって中小企業経営の厳しさを体験しました。

以上の如く、私のささやかな趣味は、仕事で多忙な人生にう

るおいを与えてくれ、豊かにすることに大いに役立ちました。——貴重なお話ありがとうございました。

そのような事情で、神奈川大学での経営学総論の講義は、自らが体験した経営実践を頼りに、悪戦苦闘の連続でありました。自分なりに許容できる講義をするために、内外の経営学関係の文献を懸命に渉猟しました。グーテンベルクの『経営経済学原理』第一巻、第二巻なども、その折大きな関心を引いた文献の一つであります。

そのような経緯から、良き師の下で、本格的な経営学研究の場が必要であることを痛感しておりました。私のグーテンベルク研究論文が機縁で、滋賀大学経済学部におられた山本安次郎先生からお誘いをいただきましたことは、大変な感激でありました。

彦根の滋賀大学経済学部へ転任したのは、その翌年の一九六一年四月でしたが、実は、滋賀大学経済学部からの割愛依頼を巡って、かなりの困難が生

じました。わずか一年足らずの勤務で、他大学への転任を申し出たのですから、当時の米田学長が強く反対されたのも当然のことでありました。大学教員の移動には、所属大学長の承認が通常必要でありましたので、このような事態に大変困惑致しました。

るか否かを判断する多くの機会に直面しました時、いつも山口先生のその時の言葉を思い起こして居りました。かくて、私の滋賀大学経済学部への転任が無事に実現したのであります。

二 よき師、よき仲間、よき友との出会い

当時の神奈川大学法経学部の学部長は、私が東京商科大学の学生の頃、金融論・外国為替論の講義を拝聴した高名な山口茂先生でした。事態を打開するため、山口学部長に私の思いを率直に申し上げて、ご理解とご援助をお願いいたしました。山口先生に伴われて、学長室に向かった時のことを、今でも鮮明に覚えております。

私にとっての彦根の思い出といえは、それはまさに滋賀大学経済学部での思い出に他なりません。

経済学部における最初の担当科目は「経営財務論」でした。まだ駆け出しの教師にとってこの科目はなかなか荷が重く、とくに「企業金融論」ではなく、なぜ「経営財務論」なのかという山本先生の問いかけは、それが経営学とはなにかを踏まえた根源的な問いでしただけに、本当に難問でした。滋賀大学に赴任した当初に、このような難しい問いかけに出会うなどは、全く予測もありませんでした。

山口先生は、米田学長に、大学に対する先生の理念を語られ、日本の学問の発展に寄与するための重要な人材である大学教員は、一大学の観点からのみ処遇すべきものでないこと、今若い研究者が新しい道を求めて苦闘している時に、それを支えてこそ大学であること、を強調されました。山口学部長の高邁な理念と見識には本当に感激致しました。その後、大学の責任者として、大学教員の転任を認可す

また、進藤、小倉、山崎、大

矢知諸先生とは、互いに年代の近いこともありましたが、時間の経つのも忘れて熱のこもった学問論議に耽ったことは、日常のことであります。このような機会は、他の大学ではおそらく望むべくもなかったでしょう。良き研究者仲間にも恵まれることも、研究者にとっては掛け替えない宝物であります。そのこととは、他ならぬ彦根の城下町という静謐な環境に大学が立地しているからに他ならないと思います。さらに、他の大学には望めない学問環境が、学生の皆さんの旺盛な勉学意欲を支えたのでありましょうし、卒業後も終生の思い出として経済学部での日々が、胸に焼きついたであります。

このように、良き師、良き研究仲間、そして良き若き友達に囲まれて過ごすことが出来たことは、本当に幸せでした。かく彦根の経済学部は、この意味でもまさに私にとっての学問の青春の地でありました。

山本先生は、私が彦根に赴任しました翌年一九六二年十月に、滋賀大学教授との併任で、京都大学経済学部に配置替えとなりました。一九六三年四月に京都

根城の堀端にあった宿舎に居られ、講義とともに、ゼミ生の演習を卒業まで指導されました。その頃、私は演習を担当して居りませんでしたので、山本ゼミに参加させていただきませんでした。そのお陰で、今日でも時折お会いして昼食を共にしながら、忌憚なく話し合える良き友人の皆さんと出会うことが出来ました。

山本先生の転任によって、彦根で身近に教えを乞う機会が失われることを心配しましたが、幸いにも暫くは彦根に居られることになり、安堵しました。先生が京都に移られるまでの間、先生のお宅に、文字どおり朝と夜となく押しかけては、C・I・バーナードをめぐる私の執拗な問いかけに、先生は真剣に相手をして下さいました。先生の学恩を忘れることはできません。その後の私の学問の方向を決めた決定的な機会がその折に与えられたのです。そのような貴重な機会を若い研究者達に与えられる学問的雰囲気を満たした場が、当時の彦根の経済学部には豊かに存在していたということとは、今日顧みると、なんと素晴らしいことではありませんか。

まさに、良き大学の真価は、研究者たちに、そしてまた、知的好

経営再建コンサルタント協同組合

理事長 長井和男 (大22回)
公認会計士

〒103-0028 東京都中央区八重洲1-5-4 共同ビル(八重洲口)505

TEL 03-5255-3511 FAX 03-5255-3512

E-mail : nagai@sai-ken.or.jp

奇心に満ち溢れ勉強意欲に燃える若者たちに、このような場を提供できることでありましよう。やがて私も自らの演習を担当することになりました。確かゼミの最初の教材には、彦根に赴任した年の四月に出版された山本先生の『経営学本質論』が選ばれたと記憶しております。『経営学本質論』は、それまでの研究の集大成で、端的に山本先生の考えを世に問うた高度な理論書であります。

その内容は、大変難しく、とくに学生の皆さんにとってはまさにそり立つ高い山でありました。かねてから、大学での勉強対象は、浴衣掛けで鼻唄交じりでも登れるような山ではなく、命がけでよじ登る険しい高い山であるべきだ、と考えておりましたので、躊躇うことなく教材に選んだのでした。この方針はその後のゼミの教材選択にあたって貫かれたと思えます。夏季合宿には、時には美ヶ原高原の袴腰ヒュッテで、北アルプスの山々を眺めながら、夜遅くまで議論が闘わされました。厳しい学問の糸によって結ばれたゼミ生の友情と結束は、その後のどのゼミにも受け継がれてきたと思います。

年度ごとのゼミの皆さんとは、今日に至りまでも彦根を含まれるいろいろな場所でお会いし、語り合う機会に恵まれております。このような稀有な結びつきこそは、彦根の経済学部が培ってきたエートスの賜物でありましょう。皆さんとお会いする度にこの得難い縁に心から感謝しております。

山本先生は一九六八年四月に京都大学を定年退官され、新設の名古屋市立大学経済学部に移られました。私もまた同じ時期に先生の要請で名古屋に移りました。

三 彦根の経済学部にかける思い

当時の経済学部は経済・経営の二学科から構成され、教員数二十数名、学生定員は一学年百四十名程度で、校舎は旧彦根高商時代の木造二階建てでした。しかし、今日の滋賀大学経済学部は九学科を擁し教員定員も百名余り、一学年の学生定員五百名を超える有様です。一学部というよりは、まさに小さな一大学ともいえる規模に成長しました。改めて隔世の感を禁じ得ません。

今日我が国の高等教育は、十歳人口の激減にも拘らず大学数は七百を超える有様です。最近では学生定員を確保できない大学は五割に達した模様です。このような大学を取り巻く環境の激変は、実は二十数年以前から徐々に始まっていたのであります。今日の事態は、のっぴきならない戦略対応を各大学に迫っていると思われまます。規模の拡大と言う成長戦略は直ちに「発展」を意味するわけではありますまい。今日の激変する環境が滋賀大学経済学部にかける戦略対応を迫っているのか、確りと見極めることが必要でありましょう。

常に土俵の中央でこそ事を決すべきであることは、企業と云わず、大学にも適用する組織の鉄則であります。思うに土俵際に追い詰められてしまつてからは、とるべき戦略の幅は著しく制約され、大学全体に厳しい痛みを伴う創造的破壊を断行する意思決定の機会は、遂に失われてしまうからであります。今日の激変する環境の最中に、賢明かつ果敢な戦略対応を選択するためには、陵水会の皆さんの叡智とお力添えこそが、彦根の経済学部の発展を支える必要不可欠な戦略要因ではなからうか、と私は確信しております。

私の「林住期」

吉田 勇夫 (大15)

は苦しくもあり楽しい思い出があります。

五木寛之のエッセイの「林住期」によると林住期とは、学生期・家住期を経て用意し準備してきたものを財産・武器として、第三の人生のために、貯えてきた体力・気力・経験・キャリア・能力・センスなどの豊かな財産の総てを土台にしてジャンプするための時期であるとしている。

つまり、若いうちから生死の疑問について心悩ませていても、世間の雑事にとらわれて正面から向き合う機会を失いがちであった。それを取り戻せる季節が林住期だと語っている。

私の身を振り返ると、六十歳からジャンプができたのか、それが成功したのか失敗したのかは自身が消え去るときにしかわからないのですが……。

私の生活で一番影響が大きいのと思われるのはやはり大学時代にラグビーにめぐり合ったことです。十九歳から六十五歳まで途中学生時代に病気で休んだ一年間と実社会に入って仕事に追われて出来なかつた三十九歳までの十六年を引いた二十九年間

は苦しくもあり楽しい思い出があります。

大学時代では同期の四名と三回生(六十五年冬)のときに全国大学ラグビー選手権で決勝戦を大阪経済大学と憧れの花園第一グラウンドで戦えたこと。四十代のころ、地元小金井市の草ラグビーチーム「小金井ラグビー」で毎週日曜日の練習と交流試合に明け暮れ、終わったあとのビールのおいしさ。五十代は現役を退き、ラグビーチームの仲間と「小金井ラグビースクール」を一九九七年に立ち上げ、生徒を集めやグラウンドの確保に奔走し、最初は生徒数二十名程で始め講師として生徒と一緒に練習をし、いまでは生徒数八十名を超えました。毎週グラウンド(桜の名所として有名な小金井公園)があり、そのスポーツ広場)に出かけております。

さらに町内の自治会長に推薦され六十三歳から今年で三年目になります。神社の世話人としても年間行事の神社の祭礼、また餅つき大会と地元の小学生の下校時や夜の地域防災パトロールと多忙なスケジュールをこなしております。今年の行事として子ども達とお年寄りとの交流や地元の活性化のために、子ど

も達に元気なお年寄りのイメージを絵画に描いてもらいました。それをTシャツにプリントして贈るといふ「ずっとげんきでね」Tシャツプロジェクトを実施したところ、二百三枚の絵画が集まり、贈呈式&発表会ではNHKをはじめ新聞社が取材に来て、ニュースや新聞記事に名前が載るといふ、実に大学入試合格者の記事以来、二度目になりました。

第七十六回東京陵水ゴルフ会
平成二十一年四月九日(木)
金乃台カントリークラブ



お花見ゴルフ

また、趣味としてラグビーしか無かった私ですが、女房の観世流謡曲と仕舞に薫陶を受け、六十歳の手習いで普化宗谷派狂竹庵に入門し二尺六寸の尺八を習い始めました。今では都山流の一尺八寸の教室にも参加して楽しんでおります。

九月二十七日には京都の東福寺内の虚無僧寺明暗寺にて虚無僧追善供養尺八献奏大会があり、師匠と一緒に「般若心経」を献奏してまいりました。

これも、腹式呼吸の健康法として練習に励んでいるところで

最後に、家族のことを話しますと女房は少し太り気味ですが、これまで健康で私を支えてくれ心の中では感謝しております。車で一〇分の所に一人娘の

家族が住んでおり、七歳と三歳のいたずら坊主の孫の世話を毎晩のようにみて成長を楽しんでおります。

今のところ、健康診断をして

もなく過ごしているのは毎日が忙しく雑事に追われ、適度に悩みながら、時には楽しみ合える仲間と家族がいて、また山中湖の山荘で森林浴でやすらぐ楽しみがあるゆえでしょうか。



第七十七回東京陵水ゴルフ会
平成二十一年六月二十四日(水)
金乃台カントリークラブ

- 4位 小梶 清司(大18) 72(11)
- 5位 中村 弘(大14) 74(16)
- 6位 白井 和宣(大14) 74(22)
- 7位 中辻 喜蔵(本21) 75(32)
- 10位 西澤 正本(大24) 78(22)
- 15位 三宅 義男(大6) 81(22)
- 20位 田中 俊男(大10) 83(20)
- 25位 北村 徹(大18) 86(18)
- BB 守谷 貞夫(大12) 91(12)
- ベスグレロ 小梶(大18) 83
- 大波賞 西澤(本24) 12打差
- 水平賞 山本孝(大9)
- ニアピン 三井(大10) 平居(大12) 田村(大12) 守谷(大12) 木戸(大16) 蔵田(大17)

(大18) が八十三のスコアで獲得した。中辻選手(本21)がラッキーセブン賞入賞、又、西澤選手(本24)が十二打縮めて大波賞と十位賞を獲得するなどベテランの健在ぶりも光った。前回優勝の山本孝之選手(大9)が水平賞、前々回優勝の守谷選手(大12)はBB賞であった。

成績

- 優勝 山本 保(大15) 66(25)
- 2位 野村 英機(大14) 72(27)
- 3位 蔵田 昭憲(大17) 72(25)

久しぶりの雨中のゴルフコンペ。久しぶりに雨に中の大会となった。三十四名九組(当初エントリー三十八名)が、前半は、雨具をつけてのプレイの中、熱戦が繰り広げられた。小口選手(大14)が、第四十八回大会以来七年振り三回目の優勝を果たした。ベスグレロには二打及ばなかったが、グロス八十三、ネット六十七の四アンダーの好成績であった。最年少の中村嘉秀選手(大18)が準優勝、第三位に



株式会社 金乃台カントリークラブ

代表取締役 戸塚 謙二

〒300-1211 茨城県牛久市柏田町3432

TEL 029-872-0182 FAX 029-872-3182

『今年も皆様のご来場をお待ちしております』

は実力者三井選手がグロス八十一のベストグロス賞とダブル受賞に輝いた。

今大会では若手の活躍が目立つ中、岡田選手(大2)が第五位、井口選手(本21)が第10位入賞、水平賞に保正選手(本24)が獲得するなどベテラン勢も健在振りを発揮した。



第七十八回東京陵水ゴルフ会
平成二十一年九月十日(木)
金乃台カントリークラブ

大十五回卒大活躍!

初秋の爽やかな秋晴れに恵まれ、第七十八回コンペが三十三名九組で開催された。各選手は、涼やかな空気の絶好のコンディションのなかで優勝目指して熱戦が繰り広げられた。

成績

優勝	小口 晃(大14)	67(16)
2位	中村 嘉秀(大18)	68(25)
3位	三井 照次(大10)	72(9)
4位	滋野 輝彦(大17)	73(12)
5位	岡田 巖(大2)	74(26)
7位	金井 肇(大14)	75(7)
10位	井口 博民(本21)	79(27)
15位	名口 幸夫(大15)	80(5)
20位	野村 英機(大14)	82(20)
25位	蔵田 昭憲(大17)	85(22)
30位	保正 保本(大24)	92(32)
B B	木戸 彪(大16)	101(21)
ベスグロ	三井(大10)	81
大波賞	木戸(大16)	12打差

水平賞 保正(本24)
ニアピン 佐藤(大10) 北村(大14) 名口(大14) 白井(大14)

B賞は川本選手(大1)が獲得した。

成績

優勝	富田 博司(大15)	71(10)
2位	奥村 勇雄(大15)	72(24)
3位	長嶺 英則(大15)	73(22)
4位	金井 肇(大14)	74(7)
5位	三宅 義男(大4)	75(22)
7位	白井 和宣(大14)	75(22)
8位	川崎 憲夫(大17)	75(10)
10位	竹内 鋭二(大4)	77(22)
15位	山口 昭夫(本21)	80(36)
20位	鶴見 芳令(大15)	85(20)
25位	吉原 悟一(大9)	89(22)
B B	川本 茂(大12)	100(36)
ベスグロ	富田(大15)	81
大波賞	白井(大14)	5打差
水平賞	保正(本24)	
ニアピン	北川2(大4) 山本孝(大9) 三井(大10) 守谷(大12) 北村(大14) 鶴見(大15)	

富田選手(大15)がベストグロスの八十一、ハンディ十ネット七十一で、ベスグロ優勝に輝いた。準優勝は奥村選手(大15)、三位にも長嶺選手(大15)と大十五回がベストスリーを独占し、二十位にも鶴見選手(大15)が入賞と第十五回生が大活躍であった。

【新規参加を希望の方】

氏名・住所・☎番号・生年月日・卒業回・所属ゼミ・クラブ・ハンディキャップを下記メールアドレスにご連絡下さい。Xの次にアンダーバーがありま

東京陵水会囲碁会便り



囲碁大会開催される

第七回陵水会大阪地区、名古屋地区、東京地区の三地区による囲碁交流対抗試合が、平成二十一年九月十三日から十四日、東京地区が幹事で熱海ニユーフジャホテルで開催されました。

者まで、また大1期生の橋谷棋士から大16期生の油谷棋士まで多士済々の猛者連中が真剣に、且つ和気あいあいに熱戦を繰り広げ戦いを終えました。一日目の前半戦の終了後の懇談会も、楽しく諸々の話題に花を咲かせ、その後は囲碁の研究をする者、カラオケに興ずるもので盛り上がりました。

翌日は午前中に後半戦を行い、その後戦績発表と表彰式を行って無事終了となりました。戦績は次の通り。

団体戦・優勝	大阪地区
二位	東京地区
三位	名古屋地区
個人戦・A組	優勝 橋谷文雄
二位	神谷守利
三位	滝沢准一
B組	優勝 新子充将
二位	浅野一通
三位	森本忠徳
C組	優勝 吉田勇雄
二位	田中秀和
三位	油谷邦治

来年は名古屋地区が担当幹事で開催されます。多くの参加を期待しています。尚、東京陵水今年度第二回囲碁大会は十二月十九日(土)開催されました。

三井照次(大10)

漕艇部創部八十五周年

記念総会の開催

田村 弘昭 (大25)

平成二十一年十月十七日(土)から二日間に亘って彦根市で母校漕艇部の創部八十五周年記念行事を開催致しました。五年毎

の総会ですが、今総会は『ボート部再興のための総決起大会』と位置づけ、今一度この栄えある歴史と伝統を未来に継承することを、現役・OB全員が確認し合い活動を開始することとしました。そして十七日の昼には旧港湾に現役・OB三十名以上が集結し、恒例のOBレガッタがスタート。ボートが転覆してしまうOBもいましたが、それでも参加者一同賑やかに、また楽しくオールを握り親交を深めることが出来ました。

開会に当たっては陵水艇友会の北村会長(大12)から最近の戦績や今後の運営方針についての報告がありましたが、部員の減少と新入部員獲得の苦労話にはOB一同、時代の趨勢を感じざるを得ませんでした。続いて成瀬学長から漕艇部に対して『漕艇部なくして滋賀大なし』と絶大な支援のお言葉を頂き、また、吉川准教授からも現役に

対する暖かい支援のお言葉をいただきました。古川元コーチからは、歴代の選手の活躍に過分の評価を頂くと共に、『大学ボート部はエイトを目指すべき』との激励をいただき、OB・現役から大拍手が沸き起こりました。その後北居監督(大18)からの現役の今後の活動方針の説明に続いて、井上総務・企画部長(大29)の解説により、創部以来八十五年に亘る壮大な漕艇部の歴史説明がスライドショーで行われました。参加者一同、それぞれが在籍した時代を懐かしむとともに、この偉大な漕艇部の歴史に思いを新たにしました。

さして士気高揚したところで、いよいよ「大懇親会」の開催となり、日本ボート協会の館理事長からの祝電「ボートのメッカ琵琶湖の雄となれ」が披露されると会場は最高潮に盛り上がり、賑やかな話し声と笑い声に包まれました。この間、現役支援の

部のパワーが発露する様相となりました。この間、現役支援の



記念式典のOB諸氏

翌日は二日酔いの朝を迎えましたが何のその、彦根カントリー倶楽部でゴルフコンペを開催。老若交え八組の参加となり、快晴のゴルフ場から絶景の琵琶湖と彦根城を垣間見ながら、まことに楽しいコンペとなりました。こうして二日間に亘る漕艇部八十五周年行事は幕を閉じた訳ですが、参加者一同、改めて彦根で過ごした四年間を懐かしみ、また、大自然の中でオールを握ったことに誇りを感じながら彦根の町を後にしたことでしょう。

五年後は九十周年、そして十五年後には百周年を迎える漕艇部の益々の活躍と、母校滋賀大学経済学部の更なる発展を期待して、この報告を終えさせていただきます。

その後、彦根ビューホテル(旧彦根プリンスホテル)に場所を変え、いよいよ記念式典を開催。なんとOBの三分の一に当たる総勢二〇〇名近くが集結、大学からは成瀬学長・小西学部長、漕艇部顧問の吉川准教授にもご列席を賜りました。また、顧問を永く勤めて頂いた富田元教授や漕艇部の力強いサポーターであった山内教授、合宿生活を温かく見守っていただいた江

部の歴史に思いを新たにしました。

西歌」の大合唱となりました。二百余名が肩を組み大円陣となつて「ああ水郷に春は来ぬ……」と、ホテル会場に響き渡る正に壮観なクライマックスとなりました。その後、三々五々会場を後にしましたが、漕艇部がこれで終わるはずもなく、同期とまた後輩と先輩と肩を組んで彦根の夜の闇に散つていったのです。

（筆者は陵水漕艇会関東支部幹事長）

駐車場の総合コンサルティング 日本駐車場開発株式会社

(東証一部上場 証券コード2353)

東京都千代田区丸の内1丁目5番1号 新丸ノ内ビルディング

〒100-6510 電話 03-3218-1900

取締役副社長 川村 憲 司 (大37回)

第六回楽柔会

平成二十一年十一月九日～十日と熱海温泉「ホテル貫一」において、第六回楽柔会を開催しました。

参加者は天田志郎（大5）、近藤隆弘（大5）、南野輝久（大5）、久木義雄（大5）、入江俊晴（大6）、林謙治郎（大6）、天木清次（大8）、荒島孝弘（大8）、松田哲弥（大8）、吉原悟一（大9）、長谷川信三（大10）、堀川幸夫（大12）、天木国夫（大14）、石田正彦（大15）の十四名でした。

大半が古希を越えた年齢とはいえ、皆元気で各自の近況報告の後、学生時代にコンパで歌った「柔道部部歌」「偲聖寮寮歌」「彦

有田会、熱海で開催

去る六月十三日～十四日、故有田正三先生のゼミの会「有田会」が開催されました。今回は久しぶりに首都圏でということになり（二十一年ぶり三回目）、当地在住の会員が世話役を勤め、温泉と眺望のすばらしい「KKRホテル熱海」を会場にして開催しました。この会は毎年開催され四十七回目を迎えますが、参加者は年々増加の傾向にあり、今年は三十七名を数え

根高商校歌」等を皆でガナリ！たのしい時間を過ごしました。

翌日、十日は用事のない六人で箱根めぐり観光バスで六時間箱根の景観と名所を楽しんで帰ってきました。来年は十一月八日から九日に大阪地区の幹事（松田哲弥氏）で行いますので、沢山の人の参加を希望します。

吉原悟一（大9）



ました。

会では第一部で文化教養をテーマにした発表が恒例になっており、今回は「詩吟を楽しむ」と題して、鈴木重成氏（大7回）が二十数年にわたって研鑽を積んでおられる「岳精流」の詩吟についての講話と実演がありました。また氏の指導で参加者全員が漢詩、俳句などの吟詠を行い、腹の底からの発声で爽快感を味わいました。

第二部の懇親会はお互いの近

況を報告し合い、熱海のきれいなところも交えて夜の更けるまで盛大かつ和やかに行われました。

そしてこの会の文集の発行と、来年は十月二・三日、有田先生の七回忌の墓参を兼ねて京都で開催することを約して終了しました。（なお十四日は有志で向いの「初島」に渡り初夏の一日を楽しみました。）

近藤達也（大13）

喜水会（大7回卒同期会）

五十周年総会開催

平成二十一年五月十四日（木）、彦根キャッスルホテルにて開催された。「五十」という節目の年にあたり、当番幹事の名古屋地区在住者の積極的な働きかけに応じ、今回の参加者は四十八名にのぼり、総会・懇親会が盛会裡行われた。総会では来賓として参加いただいた陵水会理事長・大森修太郎氏の御挨拶があり、陵水会および母校の現況などが紹介された。

卒業以来初めての参加者もあり、旧交をあたためる場面がそこかしこにみられた。懐かしい学歌、寮歌、逍遙歌の大合唱に混じって、詩吟の朗詠があったり、ゼミ単位でのアカペラ合唱

が高らかに歌い上げられたりの大にぎわいであった。

会は、午後八時過ぎ滞りなく終了し、次回の再会を約して散会した。

鈴木重成（大7）

三五会（大8回卒同期会）

三年ぶりの賑わいで開会

二〇〇九年十月二十三日（金）、彦根キャッスルホテルをメイン会場に開会。受付は母校陵水会館前で午後十一時から。懐かしい顔ぶれが三年ぶりで、少し秋色に染まった学園の木々のもとに集まってくる。予定通りの出席者を幹事が把握し、マイクを渡してピストン輸送してもらいメイン会場に集合した。ホテル前で記念撮影の後入室。今回の出席は四十一名。同期の約二十五パーセント。幹事は大阪地区が担当。出席の東京支部

在籍者は、天木清次、大島明美、奥井繁夫、尾本政二、小森清美、瀧川雅一、寺田耕三、刀祢館信雄、並川淳、林史欣、松浦幸作各君十一名。午後零時半から総会が始まる。開会の挨拶のあと物故した学友たちの冥福を祈って黙祷、本会幹事長門野久義君から開会までの経緯などが説明される。

来賓としてご出席の母校就職担当准教授、川崎昊氏（大14）から母校の近況を資料に基づき細かく伺う。女子学生が三〇パーセント以上の学園風景、二回生から三回生へ進む段階、四回生終了の時点に極めて留年が多いことなどが印象に残る。宴会のテーブルを囲んで一人一人から近況の報告。夫婦二人だけの毎日を過ごす者が多くなっている。

ゼミ別、クラブ別に写真撮影。カメラの前に思い出を一つにした仲間と立つと一層の懐かしさがこみあげてくる。会もアトラクションに移って谷口宏君（大阪地区）のハーモニカ演奏が披露される。「東京ラブソング」「千の風になって」「月がとつても青いから」などと演奏が続き、皆で手を叩きながらの「チャンキおけさ」で賑やかに終了。

終盤に入って偲聖寮寮歌を有志が正面に立ち、深い絆を心に流し込むような感じで見みじみと唱和。同期会の弥栄と会員の健勝を祈って万歳三唱。今回は二〇一二年、名古屋地区が幹事で、会場は彦根、開期は秋、日帰り、とおおよその開催要領を確認し午後三時過ぎに幕を閉じた。

林 史欣（大8）

彦根コンベンションセンター

—滋大陵水新聞会

「他大学との連携」

本学では滋賀県立大学や龍谷

といつた感じである。本学から

多数的の学生が参加している。

単位互換制度は、滋賀県内に

いたった滋賀県内にキャンパスを

ある他大学の科目を履修し、そ

持つ他の大学や短期大学と共

れを所属大学の単位として認定

に、環びわ湖大学コンソーシア

ムを平成十五年（二〇〇三年）

に組織し、連携して事業を展開

することができ、学生の視野が広

は、環びわ湖大学コンソーシア

ムに加盟している大学の学生が

毎年秋に一堂に会して行われる

「びわ湖学生Festiva」

や、これらの大学間における単

位互換制度、滋賀県民を対象と

した公開講座の主催などといっ

たものが挙げられる。

「びわ湖学生Festiva

」は、学生同士や地域との交

流、また環境保護の観点から、

大津港を出航する遊覧船内をメ

イン会場として様々なイベント

が開催されている。この「びわ

湖学生フェスティバル」は環び

わ湖大学コンソーシアムに加盟

する各大学の学生が主体となっ

て開催されており、まさに滋賀

県内の大学が合同で行う文化祭

学校の取り組み以外に私たち

新聞会で、紙面を通しての交流
が行われている。

早稲田大学。政治・経済に鋭

いメスを入れ社会を斜めに読み

解く新聞作成者の強い意志が感

じられる。アメリカの軍事拡大

による経済政策を鋭く批判し、

クリーンエネルギーと呼ばれて

いる原子力発電に警鐘を鳴らし

続ける。記事にクラブ、高校生

活関連の比重は高い。フォトジ

ャーナリストで知られる広川隆

一氏、生粋の記者筑紫哲也氏、

日曜日朝の顔田原総一郎氏を輩

出、日本のジャーナリズムの礎

を作った大学である。

東京大学。日本の大学新聞の

ほとんどは東大が右を向けばほ

とんどが右を向いたのだ。東京

大学の新聞は一般紙に負けずと

も劣らない。日本の最先端が集

まる東大ではなんでも記事にで

きるといふことで新聞のクオリ

ティは高くバラエティに富む。

記事にアカデミックな扱いが多

い。

当滋賀大陵水新聞はこれから

社会的な記事にどんどん参加し

ていき、学生にとって有益だと

思えるものを追求し、以上の代

表的大学新聞との交流を密にし

たい。

喜寿記念七十七碗展

平成二十一年度年会費納入者
(十一月末日現在)

予てから陶芸の腕を磨いてこ

られ、作品展も数回開催されて

きた警方海三氏(大4)が、喜

寿を記念して(喜寿記念七十七

碗展)を左記のとおり開催いた

します。

とき 平成二十二年四月一日

(木)〜七日(水)の十三時〜十

八時。

ところ 練馬区光が丘七―六一

十二―四〇九 警方海三氏宅

(都営地下鉄大江戸線終点から

徒歩十分)。電話・「光春窯」〇

三―三九七九―八四七三。

箸方さんの話「『光春窯』の

謂われは、(光が丘春の風公園

街)は桜並木が続き、我が家の

東西の窓は桜花の借景。二十一

年間の茶陶を花見かたがたご覧

下さい。同時に中国、韓国等内

外の作家の作品コレクションも

合わせてお目にかけます。若い

と思っっているうちに喜寿とは信

じられない気持ちですが、ここ

で一区切り、集大成です。」

昨年は信州への遠出をふくめ、

都内一円を散策地に六回開催し

ました。今年も回数を多くして

開催の予定。参加希望者にはそ

の都度御連絡します。(編集部)

松居敏郎 山上敏夫(本11)、

初田 修(本12)、沼尻恒雄

(本14)、船見祐治(本15)、小

林越夫(本17)、山廣 新 佐

野志郎 若林定男(本18)、石

田定夫 高木克幸(本19)、葛

上宗一郎 田波隆興 辻 暢夫

山成軒六(本20)、井口博民

犬塚昌一 梅沢誠質 河添治男

竹内政太郎 土田 茂 豊田弘

毅 鳥居和也 中辻喜蔵 樋口

廣太郎(本21)、高山義雄 多

賀芳則 辻 雅仁 寺本康郎

中山弘一 丹羽鑛治 橋本 侃

林 輝治 山口昭夫(本22)、

岡崎昭三 瀬川泰助 西尾 實

前川彌之祐 松本 義 吉田光

雄(本23)、大竹德行 岡田

浩 加納淳司 楠田迪彦 高木

早苗 西澤 正 保正 保 矢

田佳三 若園正夫(本24)、奥

村忠雄(東1)、井上泰一(東

4)、川瀬孝太郎 加藤福志

(東5)、市川博史(別5)、落

合忠一(別11)、外江龍太郎

(工2)、井上祐一 川本 茂

小池英夫 渡辺貞二 内海清安

(大1)、乾 哲彦 岡田 巖

亀井潤吉 郷 治雄 柴田茂夫

新宮 毅 刀彌館治男 宮崎

正 水引芳雄 渡辺陽彦 川辺

正郎(大2)、神谷 誠 神崎 野 浩 日下部百也 坂田忠彦 細江謨夫 馬島惟安 山本 保 高田良典 中井義邦 藤野義男 西野忠宏 西村 毅(大33)、
 栄次 小八木俊雄 清水克純 田川行雄 中川和己 中島勝司 吉田勇夫 鶴見芳令 長嶺英則 細井富雄 細河為久馬 増田洋 大石修巳 岡武俊雄 丸山貴宏
 清水善和 中川弥次 畑 宗明 西坂徹雄 西田広彦 平瀬武明 中沢武昭 前田哲顕 小原康彦 逸 三村 哲 森口修逸 山下(大34)、清水範之(大35)、鈴
 増田茂樹 吉村 恒 用田政一 藤江忠正 藤本裕一郎 森本忠 松田克己(大15)、木津勝治 修司 米山 修 吉田光洋 吉 木 誠(大36)、久野康成 川
 村井永治 井上五郎(大3)、徳 山本孝之 吉原悟一 永田 木戸 彪 佐藤充宏 浜口栄治 田富美男 脇阪 守(大21)、村憲司 久永信也(大37)、柴
 青山松太郎 今井常清 粕淵健 博己(大9)、井上善隆 石垣 渡辺雅利 進 従道 小林隆彦 縣 忍 大谷研一 川分啓史 田敬三 大原孝明 岸野正史
 三 北川 享 佐々次郎 田岡 康 白井 健 小塩 守 小西(大16)、石川喬敏 大原和夫 北野敏彦 孝内範生 小柳津正 新崎俊光 松澤 進 北川昌樹
 讓一 竹内鋭二 谷 文夫 辻 捷治 佐藤秀孝 田中俊男 坪 岡本和之 川崎憲夫 蔵田昭憲 男 中島博道 長井和男 能島(大38)、中西健次(大39)、山
 昇平 西岡隆夫 樋上不二子 田清六 中川寿一 中沢龍彦 栗林 昭 柴原良昭 西尾郁夫 伸夫 山代真佐行 山脇一泰 本真嗣 吉田 裕(大40)、畑
 箸方海三 廣内士郎 松岡正曜 中村寿男 島山義生 服部全孝 越後和斉 滋野輝彦 柘 治三(大22)、稲波信一 棚橋 稔 瀬英樹(大41)、上田 修 山
 安江郁夫(大4)、青島 弘 細谷 隆 三井照次 山田進 豊田徳司 中根昌孝 前田忠彦 玉置辰司 中村勝己 堀江愼一 本雅由 山崎高範(大42)、榎
 天田志郎 飯島 勲 井上明郎 山田宗弘 豊原憲二 山本啓司 前田 豊 山本節夫(大17)、堀内 裕 若林 寛 品川悦夫 本佳正(大43)、北尾聡子(大
 岡田和義 神谷 亨 北村平太(大10)、池田俊明 川北直行 市岡隆治 今津松男 岡本文夫 西以久夫(大23)、大山 明 45)、森田徳康 平松慎矢(大
 郎 龍口秀夫 竹内伴道 中川 川合久嗣 関 恵文 野一色公 岡田憲治 小倉好博 北居和夫 味田耕二 徳山 均 湧川勝巳(大51)、西出健史(大52)、平
 郁三 中西三一 樋上泰功 田 平 松浦紀久雄 小林貞夫 丸 影山哲也 種田 昇 田中和夫 河江泰平(大24)、岡本幸博 野淳司 松江千尋(大53)、肥
 中修二 細井恭一(大5)、青 山一彦 美和靖男 柳ヶ瀬宏 徳山秀雄 中村嘉秀 村瀬尚文 田村弘昭 安井喜重(大25)、田茂之(大54)、菅原健一 中
 木 滋 今宿隆弘 白井 靖(大11)、稲邑明也 奥村啓一 栗原喜代次 小梶清司 松本 田村弘昭 安井喜重(大25)、田茂之(大54)、菅原健一 中
 大久保義雄 大谷毅丈夫 大野 小原捷治 守谷貞夫 田村寿夫 剛 喜田峯幸 杉野好宥 千葉 高瀬 豊 近森彦義 重田 博 島智孝 木村早希 藤野親弘
 一郎 岡田 亨 河合正紀 川 角田孝司 平居俊雄 堀内 和 茂(大18)、井上博之 岡 廣 紅谷一利(大26)、川寄信二(大57)、佐藤嘉代子 北沢勝太
 村和男 草生知治 小林仁実 堀川幸夫 宮野幸雄(大12)、司 門平孝二郎 竹森二郎 田 土居達也(大27)、大野光宏 郎 日高信次 清水俊彦 刈谷
 高橋秀治 中村博一 野崎 彰 朝比奈冬男 池田 隆 内川晃 原敏雄 伊藤博邦 江頭晋一郎 岡野茂樹 桑島英彰 馬場敬夫 忠彦(短)、島 康介(院)
 橋本長夫 林謙治郎 久木義雄 廣 小谷兼夫 小林三郎 近藤 稲野辺敬義 芝田隆行 土井利 服部 修(大28)、浅見 徹 計四六七名
 三宅義男(大6)、磯部一郎 達也 中村奎吾 星出 潔 溝 明 田辺 徹 寺井与利雄 中 上田信子 緒方俊輔 大下雅司 ○寄付金提供者
 伊藤芳朗 市川浩久 宇治原嘉 口次朗 吉田久典 若山 忠 村達夫 丹羽信治 西澤弘行 鈴木教義 田中成治 吉本準一 沼尻恒雄(本14) 吉田光雄
 政 宇野 進 浦谷政夫 佐野(大13)、天木國夫 安部 誠 西本正義 浜 筆治 宮川 誠 西田昌司 牧野 武(大29)、(本23) 中西三一 田中修二
 了 鈴木重成 竹村孔作 富永 白井和宣 小口 晃 葛山 薫 山崎竹夫 和田博之(大19)、天川富美男 磯野和也 藤原洋(大5) 加藤博善(大14) 田辺
 義孝 西野 宏 東野和弘(大7)、天木清次 池田弘孝 小 郎 清水 叡 金井 肇 田中 角田健一 松山 仁 皆川則雄 吉史 中川冬樹 常田順介(大
 7)、尾本政二 大島明美 泰弘 高橋勝彦 土井健一郎 上田 求 植田兼司 河原正喜 30)、福田徳実 谷口次呂(大 山貴宏(大34) 山本真嗣(大40)
 塩正長 尾本政二 大島明美 泰弘 高橋勝彦 土井健一郎 上田 求 植田兼司 河原正喜 30)、福田徳実 谷口次呂(大 山貴宏(大34) 山本真嗣(大40)
 小代 孝 瀧川雅一 刀祢館信 中村 弘 野村英機 羽測展世 岸岡真人 平井善三 福原 隆 31)、郡 裕一 小林智子 酒
 雄 並川 淳 西村 信 浜崎(大14)、穂山祥夫 奥村勇雄 持田晴夫 上野恵三 浜野信裕 井康就 岩田雄一 竜野寿男
 守三 林 史欣 松岡健雄 松 木村 剛 木下英男 黒田悦司(大20)、石川公一 射場茂喜 中井光治 東 徹 田邨弘樹
 浦幸作 安田一雄(大8)、小 鈴木 勝 柘野茂樹 富田博司 上田文雄 植野克美 川嶋正隆 吉田 聡(大32)、清塚 徳

東証マザーズ上場、ネット通販最大手

株式会社ストリーム

代表取締役社長 劉 海濤
顧問 西坂 徹雄 (大9回卒)



EC CURRENT

<http://www.ec-current.com/>

〒101-0021 東京都千代田区外神田2-15-2 新神田ビル7階

TEL:03-5256-7688

FAX:03-5256-7088



エレベーター等、輸送機械の営業、設計、製造、据付
保守サービス、モダニゼーションに関する全業務



守谷エレベーター

ISO9001 認証取得

守谷輸送機工業株式会社

代表取締役社長 守谷 貞夫 (大12回)
田村 寿夫 (大12回)

本社・第一工場 〒236-0004 横浜市金沢区福浦1-14-9 TEL(045)785-3111 FAX(045)780-1881
営業本部 〒220-0004 横浜市西区北幸2-9-40 銀洋ビル4階 TEL(045)322-3111 FAX(045)322-9486
東京支店 〒104-0032 東京都中央区八丁堀1-6-1 協栄ビル7F TEL(03)5542-2700 FAX(03)3297-7400

大阪支店

福岡支店

宇都宮工場

名古屋出張所

札幌出張所

発行所
〒236-0004
横浜市金沢区福浦1-14-9
守谷輸送機工業(株)内
陵水会東京支部 支部長 西坂徹雄
電話045(785) 3716
印刷所
〒110-0015
東京都台東区東上野1-28-3
船舶印刷(株)
電話03(3831) 4181

林 史欣 (大8回)
〒164-0014
中野区南台二一五-一〇
(TEL・FAXとも)
〇三-三三八一-四四三二
※編集室のメールアドレスは
hysckys@nifty.com
(次号分メ切日十月末日)

「会報」原稿・情報ご送付先

